

武蔵野をめぐる言説空間

——国木田独歩「忘れえぬ人々」を中心に——

芦川貴之

「忘れえぬ人々」(『国民之友』一八九八(明治三一・四)は、国木田独歩の代表作のひとつと目されてきたことは改めて言うまでもないが、柄谷行人『日本近代文学の起源』(一九八〇・八、講談社)で「風景の発見」の例として引き合いに出されて以後、そうした「巨視的な視点による文脈の中で捉えられることが繰り返されている¹⁾」こともまた周知の事実である。柄谷はそこで、作中人物・大津の叙述を引用したのちに、「周囲の外的なものに無関心であるような「内的人間」inner man において、はじめて風景が見出される。」と述べているが、その後の改稿で増補されたように「国木田独歩が示すのはそのような転倒である。」と断言できるかどうか。この点についてはすでに、「転倒」しているのはあくまでも「大津」であって、「忘れえぬ人々」という小説自体でもなければ、国木田独歩自身でもない。」という指摘がなされている。なぜこの指摘を取り上げるといえるか、次節で詳述するように、この作品では、人称の転換が、同時に、場面の転換を意味するからである。つまり、その人称の転換は、作品全体を統括する語り手の叙

述と作中人物のそれとの転換を意味し、当然、このような叙述の転換は、叙述主体・語り手・作中人物それぞれの関係性と密接につながる問題だからである。柄谷の「風景の発見」説は、そうした作品のあり方にとつての根本的な問題を捨象した上で成り立っているということに注意したい。小稿では、これまで部分的にか言及されてこなかった「忘れえぬ人々」の人称や叙述を詳細に分析し、その文体や叙述主体の視座を解き明かしていく⁴⁾。そして、それらを発表当時の言説や社会・文化的状況の中で捉え直すこと⁵⁾で、初出時点における「忘れえぬ人々」の解釈可能性を提示する。

—

「忘れえぬ人々」は人称の転換を結節点として、場面を四つに区切ることができる。「多摩川の二子の渡をわたつて、敲く音がするばかりである。」の冒頭場面を(Ⅰ)、「突然に障子をあけて一人の男が、秋山は黙然て首肯いた。」を(Ⅱ)、「僕が十九歳の春の半頃と記憶して居る、僕は天下必ず同感の士あること、信

ずる。』という大津の叙述を〈Ⅲ〉、「其後二年経過つた。『秋山』では無かつた。』の末尾を〈Ⅳ〉とする。

〈Ⅰ〉は、かつて亀井秀雄が「無人称の表現主体が潜在している」と指摘した箇所であるが、人称代名詞のないこの箇所をここでは「無人称的文体」としておく。つづく〈Ⅱ〉は、「主人は」^{あし}「客は」などの三人称による叙述のため「三人称的文体」と、次の〈Ⅲ〉は、「僕（等）」は「自分は」という一人称による大津の叙述が大半を占めるので「一人称的文体」とする。作品末尾の〈Ⅳ〉は、「大津は」という三人称による叙述のため、〈Ⅱ〉と同じく「三人称的文体」とする。改めて整理すると、〈Ⅰ〉「無人称的文体」↓〈Ⅱ〉「三人称的文体」↓〈Ⅲ〉「一人称的文体」↓〈Ⅳ〉「三人称的文体」、というように場面が推移していることがわかる。

〈Ⅱ〉から〈Ⅳ〉については、一人称・三人称という一般的な人称の問題として考えられるため、語り手の定位は見やすい。

〈Ⅲ〉は大津が「僕（等）」「自分」という一人称で語る箇所が大半を占めるため、語り手は大津である。その叙述の外枠となる〈Ⅱ〉と〈Ⅳ〉は大津とは異なる語り手による。ここではそれを便宜的に「三人称的文体」の語り手としておく。それでは〈Ⅰ〉「無人称的文体」の語り手の正体はどのようなものか。

二

冒頭〈Ⅰ〉の叙述については、先ほど「無人称の表現主体」という亀井の用語を引き合いに出したが、亀井は前掲文を踏まえて次のように述べている。「すでに私は、『忘れえぬ人々』の冒頭の

なかに、やがて大津に引き継がれるだろう表現主体が潜在することを指摘しておいた。これを逆に言えば、指示的構造と明示性の背後に大津的な表現主体を潜在させて、描写の客観性が獲得されてきた。そこに、『忘れえぬ人々』の冒頭のような写真が成立したのである⁽⁷⁾。これをここでの文脈に置き換えるならば、〈Ⅰ〉「無人称的文体」には〈Ⅲ〉「一人称的文体」が潜在しているということである。

亀井はその例証として次のように述べている。「書き出しのところに『その日僕は』と補い、後半の一部分をほんの少しばかり、『日が暮れて間もなくだつたが、大概の店は戸を閉めて了つてゐた。』旅人宿だけに……敲く音が洩れてくるばかりである」と書き改めてみるならば、ほとんどそのまま大津が秋山に語る「忘れえぬ人々」のなかに繰り込むことができる（傍点原文⁽⁸⁾）。〈Ⅰ〉を語る視点に「大津的な表現主体」が潜むことを想定しているのだが、その第一文に注目したい。亀井の提案通りに補うと、「その日僕は多摩川の二子の渡をわたつて少しばかり行くと、溝口といふ宿場がある。」という文になる。「～は～すると、～がある」という文の文法的な正否はここでは問わない。注意すべきは、先行する「今の武蔵野」（『国民之友』一八九八・二、のち単行本『武蔵野』収録時に「武蔵野」と改題）の「六」にも「自分は或友と市中の寓居を出で、三崎町の停車場から境まで乗り、其処で下りて北へ真直に四五丁ゆくと、桜橋といふ小さな橋がある」という同じ構造の文が見られることである。「大津的な表現主体」を先に想定するよりも、むしろここに見られるように、「今の武蔵野」の文と潜

在的には構造の同じ文が「忘れえぬ人々」冒頭の一文にあることにこそ注目すべきである。それでは、(Ⅰ)「無人称的文体」の特徴を明らかにするために、「今の武蔵野」、(Ⅱ)「一人称的文体」(天津の叙述)、それらに先行する「画」の文体を比較していく。

まず、「今の武蔵野」の文体について確認したいが、それに関して小森陽一が次のように述べている。「同じ「日本語」であっても、文体が異なれば、それは、その言葉によって認識される世界そのものが変わってしまうということなのである。それは文字通り異言語なのであり、独歩の日記から『武蔵野』への転換は、翻訳そのものであったと言えるだろう。」(9)「独歩の日記」すなわち、『欺かざるの記』(初刊は「前篇」一九〇八・一〇、「後篇」一九〇九・一)の文体と「今の武蔵野」のそれとの間に大きな隔たりがあることを指摘している。小森は、その根拠として前者に比較した場合の、後者の叙述の特徴を三つ挙げている。「第一に、場面内部の対象が叙述として統一されていること、第二に、文章のつらなりに、途切れることのない時間的持続が与えられていること。第三に、出来事の微分的な推移が、断片化されることなく言語化されていること」(10)。これらを要約するならば、空間と時間とを一つの視座から連続的に捉えた叙述が「今の武蔵野」の文体で為されているといえるだろう。

今より三年前の夏のことであった。自分は或友と市中の寓居を出で、三崎町の停車場から境まで乗り、其処で下りて北へ直真に四五丁ゆくと桜橋といふ小さな橋がある、それを渡る

と一軒の掛茶屋がある、此茶屋の婆さんが自分に向て、「今時分、何にしに来たア」と問ふた事があつた。

自分は友と顔見合せて笑て、「散歩に来たのよ、たゞ遊びに来たのだ」と答へると、婆さんも笑て、それも馬鹿にした様な笑ひかたで、「桜は春咲くこと知ねえだね」と言つた。其処で自分は夏の郊外の散歩のどんなに面白いかを婆さんの耳にも解るやうに話して見たが無駄であつた。東京の人は呑気だといふ一語で消されて仕了つた。自分等は汗をふきく、婆さんが剥て呉れる甜瓜を喰ひ、茶屋の横を流れる幅一尺計りの小さな溝で顔を洗ひなどして、其処を立出た。

以上に挙げたのは、「今の武蔵野」の「六」における「自分等」と「婆さん」とのやりとりの場面である。一人称の「自分(等)」の介在によつて、空間と時間とを一つの視座から連続的に捉えていることが見てとれる。「忘れえぬ人々」(Ⅲ)の天津の叙述にもこれと同様の特質があることを確かめたい。以下では、小品「画」(初出は『独歩小品』一九二・五、新潮社)との比較を通して考察する。

八里の道程たゞ山のみ、急坂斜めに山腹を辿ることあり、深谷を下瞰して泡立つ溪流、湛へし淵、糸の如く懸る瀑を看て行くことあり、参差たる灌木の林に包まれて路傍に立つ茅屋を顧ることあり。鈴の音を山彦に響かせて煙草スパク、放歌朗々、向の山かけを来る駄賃馬子に出遇ふことあり。(略)

山廓やまがらけて平野茫々たる處、夏日まさに天に冲して微風そよがず、蒸し暑き草の氣に打たれ喘あはぎ／＼て歩む樵夫を見ることあり。歩むに連れて、山野溪流次第に其趣きを変ずるを眺めて進むことあり。一種のチャームは恆に予を動かし、形、色、光、影は、意味深き謎語の如く予の眼に映じ、予は一心唯だ如何に画かば此謎語を解き得るか、其れのみを思を苦しめ、苦みながらも、夢みる如き愉快に耽りて、八里の難路も長きを覺えざりき。⁽¹¹⁾

『暫くすると朗々はらかなな澄むだ声で流して流るる馬子唄が空車の音につれて漸々と近づいて来た。僕は噴煙を眺めたま、で耳を傾けて、此声の近づくのを待つともなしに待つてゐた。

『人影が見えたと思ふと「宮地やよいところじや阿蘇山ふもと」といふ俗語うたとを長く引いて丁度僕等がを立てゐる橋の少し手前まで流して来た其俗語の意と悲壯な声とが甚麼いかにに僕の情を動かしたらう。二十四五かと思はれる屈強な壮漢わがやうなが手綱を牽いて僕等の方を見向きもしないで通つてゆくのを僕はぢつと睥視みめてゐた。夕月の光を背にしてゐたから其横顔も明毫あきまりとは知れなかつたが其違ちがひな体軀からだの黒い輪廓りんかくが今も僕の目の底に残つてゐる。

前者が「画」からの抜粋である。「画」は『欺かざるの記』の記述に拠つて、独歩の阿蘇行き（明治二七年一月一日）以前の明治二六年四月十二日に書かれたと推定されているが、「放歌朗々、

向の山かけを来る駄賃馬子」という表現が、後者の「忘れぬ人々」(Ⅲ)における阿蘇の「馬子」の描写の原型になつてゐると考えられるため比較対象とした。⁽¹³⁾

前者は「～することあり」という文末によつて、見聞した光景の叙述を積みかけるように並べた後、「一種のチャームは長きを覺えざりき」という一文で、それらを「予」の過去回想として集約的にまとめている。このように、前者には一人称の「予」が介在するものの、並列された断片的な出来事を過去回想の形で一挙に意味づけている。それに対して後者の(Ⅲ)は、「僕(等)」という一人称代名詞を文中の所々に挟み込み、その視点人物を軸にして外部の対象との距離を叙述している。ここでは、出来事が空間的にも時間的にも断片化されることなく、ひと続きのものとして語られている。

このことから(Ⅲ)は、空間と時間とを一つの視座から連続的に捉えた叙述といえる。さらには、引用部末尾の「黒い輪廓が今も僕の目の底に残つてゐる」という、大津による語り現在の叙述が(Ⅲ)に含まれることもまた、「今より三年前の夏のことであつた」という「今の武蔵野」の「六」の叙述と同様に、「今」という語りの現在を叙述の基点として示している。このように、「今の武蔵野」の「六」と「忘れぬ人々」(Ⅲ)の叙述のあり方は酷似している。この点は、小稿冒頭で引き合いに出した柄谷の「風景の発見」説が、「今の武蔵野」の「自分」と「忘れぬ人々」の大津との相違を捨象して、「風景の発見」の契機とされる「転倒」を見出したことと大き

く関わっている。

さて、空間と時間とを一つの視座から連続的に捉えた叙述が、「今の武蔵野」の「六」と大津の叙述である（Ⅲ）との両方に共通することがわかった。先ほど確認したように「くは：すると、—がある」という、「今の武蔵野」の「六」の文と共通の構造を潜在させた文が「忘れえぬ人々」の冒頭（Ⅰ）に含まれることと併せて考えると、そこに「一人称的視点を持つ『大津的な表現主体』が潜在することを予期させる。けれども、実際に（Ⅰ）に「大津的な表現主体」が潜在し、それを通して空間と時間とを一つの視座から連続的に捉えた叙述がなされているであろうか。以下、冒頭（Ⅰ）を詳しく見ていく。

多摩川の二子の渡をわたつて少しばかり行くと溝口といふ宿場がある。其中程に亀屋といふ旅人宿がある。恰度三月の初めの頃であつた、此日は大空かき曇り北風強く吹いて、さなきだに淋しい此町が一段と物淋しい陰鬱な寒むさうな光景を呈して居た。昨日降つた雪が未だ残つて居て高低定らぬ茅屋根の南の軒先からは雨滴が風に吹かれて舞うて落ちて居る。草鞋の足痕に溜つた泥水にすら寒むさうな連が立て居る。日が暮れると間もなく大概の店は戸を閉めて了つた。聞い一筋町が寂然として了つた。旅人宿だけに亀屋の店の障子には燈火が明く射して居たが、今宵は客も余りないと見えて内もひっそりとして、をり／＼雁頭の太さうな煙管で火鉢の縁を敲く音がするばかりである。

叙述の流れに沿つてみると、場所や時節、天候、それらを具体的に示す事物の描写が次々と示されている。三文目から四文目にかけての、大空から軒先へと導かれる視線に大津の眼差しを重ねることはそれほど違和感を生じさせない。次の「草鞋の足痕に溜つた泥水」の「寒むさうな連」を見つめる視線もそのように読めなくはない。確かに、この場面に「大津的な表現主体」の眼差しを想定してみることも全く不可能とは言えないのである。それはつまり、一人称的視点の介在を（Ⅰ）に想定することも一応可能だということである。

しかし、「多摩川の二子の渡をわたつて少しばかり行くと溝口といふ宿場がある。」という冒頭文に再度着目したい。ここで示される移動の起点はどこであろうか。二子の渡から溝口へという進行方向の手前は東京であるため起点は東京方面にあると言える。つまり、冒頭文からは東京—二子の渡—溝口という移動が想起されるのであるが、大津は（Ⅱ）で「今日は晩くなつて川崎を出発て来た」と述べており、そのような移動と齟齬をきたすことがわかる。したがって、「大津的な表現主体」の潜在を（Ⅰ）の場面に想定することは、叙述主体と登場人物との謂れなき混同につながるといふ観点から退けられるべきである。

さらには、「草鞋の足痕」という語が現れてから間もなく、（Ⅱ）で「洋服、脚絆、草鞋の旅装」という大津の格好が示されることにも注意したい。情報量の限られる短編の読み手にとつて、「草鞋」という語が二つ近接して示された場合、それらの語の連関を

優先することが想定される。つまり読み手は、冒頭場面の「草鞋」と大津の旅装としての「草鞋」をひとまず同一視するというところである。また、大津が「洋服、脚絆、草鞋の旅装」で現れた後、「一寸湯をお呉れ」と言い、それに応じた亀屋の主人が「早くお湯を持って来ないか」と持って来させたお湯で足を洗うことも、冒頭の「草鞋の足痕に溜つた泥水」を想起させる。この一連の描写から、大津が、亀屋へ向かう道中に「草鞋の足痕」を残して行き、そこでつけた泥を含む汚れを亀屋の土間で洗ったと考えることができるのである。

すなわち〈Ⅰ〉「無人称的文体」は、大津が過ぎ去った後の光景をも叙述していたと考えられる。つまりそれは、「大津的な表現主体」による単一的な視座からの叙述を〈Ⅰ〉の場面全体に想定した、亀井の説とは異なる読みを可能にする描写が〈Ⅰ〉に含まれることを示している。

さて、ここまで〈Ⅰ〉を亀井の説に倣って「無人称的文体」と呼んできたが、右でその説と異なる視点が確認されたため、それを〈準三人称的文体〉と言い換えたい。なぜ「三人称」に「準」するかといえば、右に確認した通り、冒頭における「草鞋の足痕」が大津の存在をほのめかすからである。さらには、同じ場面の「雁頭の太さうな煙管で火鉢の縁を敲く音がする」という描写が、次の場面〈Ⅱ〉の「長火鉢に寄か、ツて胸算用に余念も無かつた主人」や「太い指が煙草を丸めだした」という描写と呼応し、主人の存在をほのめかしていることもその根拠となりえよう。つまり、冒頭〈Ⅰ〉は、大津と亀屋の主人との両者を客体化して間接

的に提示しているのである。¹⁶⁾

このように見てみると、冒頭〈Ⅰ〉の〈準三人称的文体〉は、〈Ⅱ〉の「三人称的文体」へと円滑に移行していることがわかる。したがって、〈Ⅰ〉や〈Ⅱ〉の背後に想定される叙述主体は同一のものと考えられよう。また、〈Ⅳ〉も「机の上には二年前秋山に示した原稿と同じの『忘れ得ぬ人々』が置いてあつて、其最後は書き加へてあつたのは「亀屋の主人」であつた。／『秋山』では無かつた。／は改行を示す、以下同じ」として〈Ⅱ〉における主人や秋山の存在を示唆していることから、〈Ⅰ〉〈Ⅱ〉と同様に〈Ⅳ〉も同一の叙述主体によるものと言える。

それでは、大津の叙述が大半を占める〈Ⅲ〉の叙述主体の正体はどのようなものか。実は〈Ⅲ〉には大津の叙述ではない箇所が一つだけある。「此処まで話して来て大津は静かに其原稿を下に置いて暫く考へ込むでゐた。戸外の風雨の響きは少しも衰へない。秋山は起き直つて、／＼それから。」という箇所である。「戸外の風雨」という語は〈Ⅱ〉でそのまま用いられ、「其原稿」もまた、〈Ⅳ〉に「二年前秋山に示した原稿」という形で登場する。したがって、〈Ⅲ〉の背後には〈Ⅰ〉〈Ⅱ〉〈Ⅳ〉と同じ叙述主体が潜んでいるといえよう。つまり、「忘れえぬ人々」には、全体に通底する叙述主体の存在が確かめられるのである。

三

それでは、「忘れえぬ人々」を統括する叙述主体は、作品舞台を提示する際にどのような操作をしているだろうか。冒頭の第一

文を改めて見直したい。「多摩川の二子の渡をわたつて少しばかり行く」と溝口といふ宿場がある。」というその文は、先ほど確認した通り、東京から溝口へ向かう移動を想起させる。このような移動を冒頭で示すことは、作品舞台が東京の周縁部に位置することと、同時に、読み手の位置を東京方面に想定しているということとを意味する。

まずは前者から考えていくが、東京の周縁部でも特に「溝口といふ宿場」の中程にあるということが地理的に意味するのは、そこが大山街道沿いだということである。「この道は江戸中期より盛んになった大山阿夫利神社への参詣の道であり、夏ともなれば江戸やその近郷の人々が代参に急いだ道でもある」ということは見逃せない。大山街道沿いの「旅人宿」である亀屋にとつて、東京からの大山への参詣者は真つ先に想定される客層だからである。しかしそれは東海道線の鉄道が敷設される以前のことである。発表時期から時代設定が東海道線開通以後と考えられる。「忘れえぬ人々」の亀屋にとつては必ずしも当てはまらない。当時の大山参詣の紀行文からもそのことが推測できる。

例えば、一八九六（明治二九）年八月二五日『東京朝日新聞』朝刊掲載の吐芳「避暑みやげ（上）大山詣」では次のような道行が示される。

新橋に行きて乗込みしは八日の終列車なり噂に聞きつる大山に登りてみばやと思へば藤沢にて下車せしに何れの宿も客溢る、ばかりにてつれなくも断わられればとて又腕車もなし

暫くは困じ果てしが又例の負けじ魂ふり起して星を明りに東海道を右に折れ幅狭く草深き大山街道の捷徑を往く四里余りの路を人にも遇はず重き足を犬に吠えつかねなどして苦し言はんばかりなりけれど飛びかふ螢、蟲の音はいくらかの心やりなり

東京から大山へと向かうにあたつて新橋から藤沢まで東海道線の鉄道を用い、そこから先は徒歩で東海道、大山街道へと進む行程を示している。東海道線開通以前は、東京から大山へ向かう旅客が溝口の亀屋にも数多く泊まったと推察されるが、東京からの大山参詣が右のような状況下にあることを勘案すれば、「忘れえぬ人々」の「へ」で、溝口の町に「さなきだに淋しい」という形容が付されたことは肯ける。季節の違いはあるが、「何れの宿も客溢る、ばかり」である藤沢と比べると、溝口は客の少ない閑散とした場所なのである。

「寒いく／＼糞まじりの風が広い武蔵野を荒れに荒れて終夜、よもすがら暗な溝口の町の上を哮へ狂つた」。このような「武蔵野」の一角にある閑散とした町が「忘れえぬ人々」の舞台であることの意味は何であるか。やはり、冒頭文で叙述主体が東京を起点として叙述していることから東京との関係性をさらに掘り下げたい。「忘れえぬ人々」の二か月前に同じく『国民之友』に発表された「今の武蔵野」の「七」では、友人からの書簡の引用という形で「東京」と「武蔵野」との関係を示している。

僕の武蔵野の範囲の中には東京がある。しかし之は無論省かなくてはならぬ。なぜなれば我々は農商務省の官衙が魏峨として聳て居たり、鉄管事件の裁判が有つたりする八百八街によつて昔の面影を想像することが出来ない。それに僕が近頃知合になつた独乙婦人の評に東京は「新しい都」といふことが有つて、今日の光景では仮令徳川の江戸で有つたにしろ、此評語を適當と考へられる筋もある。斯様なわけで東京は必ず武蔵野から抹殺せねばならぬ。

しかし東京の南北にかけては武蔵野の領分が甚だせまい。殆ど無いといつてもよい。是れは地勢の然らしむる処で、且鐵道が通して居るので、乃ち「東京」が此線路に由て武蔵野を貫いて直接に他の範囲と連接して居るからである。僕はどうぞも左う感じる。

前者は、後者の「東京」が意味するところを述べたものと言へる。その中の「農商務省の官衙が魏峨として聳て居たり、鉄管事件の裁判が有つたりする」というのは、「僕は東京」と言う大津が(Ⅲ)で述べたような、「名利競争の俗念」が渦巻いているということを意味してしよう。後者では、そのような「東京」が鐵道線路によつて「直接に他の範囲と連接して居る」ことが述べられる。まさにその様子を書き留めているのが、先ほど挙げた吐芳「避暑みやげ(上) 大山詣」ではないだろうか。東京から終列車に乗り込んで着いた先の宿場での、すでに先客で溢れかえつて泊

まる宿すら見つからないという状況は、やはり「競争」と呼ぶに相応しい。そのような「競争」を強いるのは、鐵道線路で直接に連接した「東京」であり、「東京」を他の範囲に連接する鐵道線路なのである。

さらに、次に示す二つの記事は「忘れえぬ人々」発表当時(明治三十年前後)の溝口と「東京」との關係を端的に示している。

●浦浜鐵道 埼玉県浦和町星野平兵衛氏外十余名は資本金百六十万円を以て神奈川県神奈川より溝ノ口、荻窪白子を経て浦和に至り右折して流山に至る四十一哩間に浦浜鐵道敷設を願せり

●玉川電気鐵道 府下麴町赤坂両区の有志者十余名の發起に係る同鐵道は赤坂弁慶橋より青山を経て渋谷停車場に至り大山街道を一直線に二子村より神奈川県下溝ノ口に至る十二哩の鐵道にて今回府庁に出願せり

前者は一八九六(明治二九)年七月三十日、後者は同年八月二一日、いずれも「東京朝日新聞」朝刊の記事である。この年が「第二次鐵道熱期」にあたることに注意したい。当時の鐵道熱について武知京三は次のように指摘している。「日清戦争終了後の翌一八九六(明治二九)年は、空前の投資熱が起り、各企業部門において活発な活動が展開されたが、鐵道投資は異常なものがあつた。(略)同年度に仮免許の申請を行ったものは実に五五五

件にも達している。もつとも、このうち仮免許を受けたものはごくわずかであり、出願者のほとんどが同一路線の競願であるか、または鉄道としての基本設計が妥当でないと判断され、その大半は却下された。²¹⁾

このように、「東京」を特徴づける「競争」が鉄道敷設の出願においても見受けられるわけだが、右に挙げた二つの出願は、いわば鉄道で溝口を「東京」に連接させる計画といえよう。前者は却下されてその後も新聞報道には現れないけれども、後者については、翌一八九七（明治三〇）年一月二〇日『東京朝日新聞』朝刊がその結果を報じている。

●鉄道可決 麹町区小磯某氏外二十余名の發起に係る玉川電気鉄道（赤坂区弁慶橋を起点とし青山渋谷宮益町より厚木街道を二子の渡を経て神奈川県溝口に至る）は此程通常府会に於て可決せり

東京市赤坂区から渋谷を経由して溝口に至る鉄道の出願が可決されたこの事実²²⁾が示すのは、鉄道による溝口と「東京」との連接が現実味を帯びてきたということである。つまり、この翌年四月に発表された「忘れえぬ人々」の舞台・溝口は、「競争」という原理を持つ「東京」に取り込まれることが差し迫った場所だったのである。逆に言えば、溝口から見た「東京」は、「競争」の淵源として周縁部を侵食していく存在だったのである。

他方で、「僕は東京」という大津のような東京人にとつての「東

京」はどのようなものといえるであろうか。「名利競争の俗念」が渦巻く、という以外にも、同時代の言説からその特質を見出すことができる。

「東京及び東京市民」と「東京市民の祝祭」という二つの論説は「忘れえぬ人々」と同号の『国民之友』三三八号に掲載された。その発行日と同じ明治三二年四月一〇日に奠都三十年祝賀会が開かれた²³⁾ことは念頭に置く必要がある。『東京市民の祝祭』は、その祝賀会について「東京市民をして市民たるの分限を自覚せしむるの一端ともなるべし。」としている。以下は「東京及び東京市民」の一節である。

独り彼等が市民たる自覚心を發揮するのみならず、市民たるの経営を為し。市民たるの生活に入り、之を好み、之を樂み。一百五十万の市民が、其の共同的、一族となるに到りて、始めて東京をして、極東の大都たるを誇らしむるに足らむ。（圈点略）

「東京市民」を「共同的、一族」という言葉で一括りにしようとする力学が働いている点は注目に値する。このような言説は「東京」の範囲外の人々を除外し、範囲内の「東京市民」の共同性を強固にしようとするものである。

「忘れえぬ人々」がこれらの言説とともに掲載されていることは一考すべき問題である。なぜなら先ほど確認したように、「忘れえぬ人々」冒頭文の叙述主体が示した移動の起点が東京方面に

あるからだ。これらを踏まえると、「多摩川の二子の渡をわたつて少しばかり行くと溝口といふ宿場がある。」というその文から想定される東京方面の読み手に、右の「東京市民」を当てはめることが可能だということがわかる。

四

前節で確認した「東京」と溝口との関係や「東京市民」のあり方を踏まえて、「忘れえぬ人々」の解釈可能性を明らかにしている。その解釈の鍵は末尾の後日譚が示している。

其後二年経過つた。

大津は故あつて東北の或る地方に住つてゐた。溝口の旅宿で初めて遇つた秋山との交際は全く絶えた。恰度、大津が溝口に泊つた時の時候であつたが、雨の降る晩のこと。大津は独り机に向つて冥想に沈むでゐた。机の上には二年前秋山に示した原稿と同じの『忘れ得ぬ人々』が置いてあつて、其最後に書き加へてあつたのは『亀屋の主人』であつた。

『秋山』では無かつた。

大津が「忘れ得ぬ人々」の原稿に書き加えたのが「亀屋の主人」であつたことが示される結末部に、「『秋山』では無かつた。」と付け足されている。語り手・大津にとつては、単に事実を示す末尾の一文は蛇足に過ぎない。しかし、第二節で示したように、「(準三人称的文体)」によつて大津と亀屋の主人とを客体化して示した

〈Ⅰ〉の叙述と、〈Ⅱ〉から〈Ⅳ〉までの三人称的視点によるそれとを前景化し、〈Ⅲ〉における大津の叙述を後景化した読みをするならば、末尾の後日譚は、相対的な関係にある大津、亀屋の主人、秋山のうち、大津と秋山との関係を退け、大津と亀屋の主人との関係を選び取つたということを叙述主体が強調したものと解することができる。

この結末の意味するところを理解するために、前節でみた作品舞台の持つ同時代的な意義を再度確認しておきたい。亀屋の主人が生きている溝口は、鉄道によつて、「競争」という原理を持つ「東京」に取り込まれることが迫つた場所である。それを踏まえて主人と家内の人々との次のやり取りを見直す。

「お婆さん、吉蔵が眠むさうにして居るじやあないか、早く被中爐あなかを入れてやつてお寝かしな、可愛さうに。」

主人の声の方が眠むさうである、厨房くりやの方で、

「吉蔵は此処で本を復習ふくしゅうて居ますじやないかね。」

お婆さんの声らしかつた。

「さうかな。吉蔵最うお寝よ、朝早く起きてお復習いな。お婆さん早く被中爐を入れておやんな。」

「今すぐ入れてやりますよ。」

〈Ⅱ〉における主人と老母とのこのやり取りは、「競争」という観点から読み直すに当たつては欠かせない箇所であろう。なぜなら、息子の吉蔵が「本を復習て居る」からである。ここでは「復

習」という字から、吉蔵が学校の勉強を「お復習い」していると考えられる。「忘れえぬ人々」発表の前年、明治三〇年は溝口が位置する神奈川県に県立中学校が初めて開校した年であった。⁽²⁵⁾ 勉学の面での「競争」が徐々に表面化してきた時代状況にあつて、息子の吉蔵が学校の勉強を「復習」しているにもかかわらず、主人は構わずに寝かせようとする。主人がいかに「競争」とは無縁の場所に生きてきたかがこのやり取りから測り知られる。

この場面は大津が部屋に通された後のことなので、亀屋の主人に付随するエピソードとして大津が「忘れ得ぬ人々」の原稿に書き加える由もないが、「忘れえぬ人々」の叙述主体は読み手にこのエピソードを明かしている。このような叙述主体の意図を重視して考えるならば、末尾の後日譚は、まもなく「東京」の侵食によつて消えることが予期される「競争」とは無縁の主人の姿を、東京人・大津が見逃さずに覚えていたということを読み手に示したものと考えられる。つまり「忘れえぬ人々」は、冒頭第一文によつて読み手として想定される「東京市民」、すなわち、鉄道と連携して「東京」の周縁の人々を「競争」に巻き込むと同時に、「共同的な一族」として自らの共同性を強めようとする「一百万の市民」に対して、その活動の「犠牲者」となることが予想される。「競争」とは別の文脈に生きてきた亀屋の主人のような存在が、「東京」から至近の距離に存在することを先取りして示していたのである。

それではもう一方の、退けられた大津と秋山との関係はどのようなものか。(Ⅱ)にある通り、大津は「無名の文学者」、秋山は

「無名の画家」で、「美術論から文学論から宗教論まで二人は可なり勝手に饒舌つて、現今の文学者や画家の大家を手ひどく批評して十一時が打つたのに気が付かなかつた」。初めて宿で顔を合わせた者同士の間わり合いとしては非常に親密なものであることがわかる。お互いは「赤の他人」同士であるが、共通の話題を持ち合わせている点からして「同種類の青年」である。二人が「戸外の風雨」を耳にした時、秋山は大津に「こんな晩は君の領分だね」と声を掛けながらも、同時に「大津の今の顔、今の眼元は我が領分だと思」う。大津はそれに呼応するように、阿蘇の荒涼とした光景を秋山に語る際、「之れを描くのは先づ君の領分だと思ふ」と述べる。つまり、この応答から、「領分」を分かち合うべき対象としての「何か」が、大津と秋山との間に共有されているということがわかる。だが、その「何か」は結局名指されないままに作品は閉じられる。

ここでは、お互いに分かち合っているものの正体が明かされないことこそ重要である。分かち合っている「何か」自体について大津と秋山との間で名指されないにもかかわらず、両者はその「何か」が存在するということは信じている。だからこそ、「領分」という言葉だけで相互に会話が通じるのである。互いの頭の中に思い浮かべるものがたとえ一致しなくとも、思い浮かべる対象が両者の頭の中に存在し、それが同じものであると信じている。大津と秋山のそのようなあり方が示すのは、二人が「同種類の青年」であることを裏付ける想像上の紐帯の存在である。このように、想像上の紐帯で繋がれた大津と秋山との関係性は、想像上の共同

性を保持するという点で、前節で示した「東京市民」と類比的な関係にある。「忘れえぬ人々」の叙述主体は、そのような想像上の共同性に基づく関係を作品末尾の一文で退けたと言つてよい。換言すれば「忘れえぬ人々」は、大津と秋山との間に見られるような、共同性に基づく関係性の最大公約数的なあり方を退けることによって、「東京市民」に対する批評性を内包した価値観をも示していたのである。

したがって、「忘れえぬ人々」は、発表当時の「東京」や「東京市民」のあり方を再考させる可能性をもつ作品だったと言えよう。

- 注(1) 中島礼子『国木田独歩の研究』(二〇〇九・七、おうふう)二六七頁に「主として、(小民)あるいは(風景)を視座にして理解されてきて」との記述がある。風景を視座にした例として同書に列挙されていないものを以下に示す。森本隆子「風景と感性のサブライム―志賀重昂から夏目漱石まで」(『近世と近代の通廊―十九世紀日本の文学』二〇〇一・二、双文社、のち『崇高』と『帝国』の明治―夏目漱石論の射程』二〇一三・三、ひつじ書房)は柄谷の説に則つて、「忘れえぬ人々」から「転倒」の美学を引き出している。また、松本常彦「コダック眼の小説―国木田独歩―忘れえぬ人々」の場合(『香椎湯』二〇一二・三)は柄谷の説を踏まえ、「風景の発見」という問題が、「忘れえぬ人々」にとって中心の問題であることには変わりない。」としている。
- (2) 『定本柄谷行人集第一巻(日本近代文学の起源)』(二〇〇四・九、岩波書店、以下『定本起源』とする)三〇頁
- (3) 佐々木敦「新しい小説のために 第三回 近代文学VS近代絵画」(『群像』二〇一三・一一)

- (4) 管見によれば、「忘れえぬ人々」に関して初めて人称を問題にしたのは亀井秀雄「第十二章 自然が管理されるまで」(『感性の変革』一九八三・六、講談社)である。以後、関肇「記憶を語る言葉―国木田独歩「忘れえぬ人々」論―」(『光華女子大学研究紀要』一九九七・一二)に人称に関する部分的な言及があるが、概括的には「忘れえぬ人々」に関して人称の問題は回避されてきたといえる。また、「忘れえぬ人々」の叙述主体の視座に関わる問題として、小泉浩一郎「忘れえぬ人々」(『国文学』解釈と鑑賞(特集)独歩と花袋)一九八二・七)が「作者の超越的視点(傍点原文)」という見方を提出しているものの、「作者」という枠内に叙述主体の位置をとめている点は小稿の論旨と意義を異にする。

- (5) 「忘れえぬ人々」の場面区分を示した主な先行研究に、北野昭彦「第九章 独歩「忘れえぬ人々」のパラドックス」(『宮崎湖処子・国木田独歩の詩と小説』一九九三・六、和泉書院)二五九、二六〇頁がある。そこでは人称の転換とは無関係に場面が区切られており小稿の区分とも異なる。
- (6) 亀井前掲書二九五頁
- (7) 亀井前掲書三〇三頁
- (8) 注(6)に同じ
- (9) 小森陽一『ゆるぎ』の日本文学』(一九九八・九、日本放送出版協会)三八頁
- (10) 注(9)に同じ
- (11) 引用は『定本国木田独歩全集』(増訂版、一九七八・三、学習研究社、以下『全集』とする)第九卷三二九、三三〇頁
- (12) 「解題」『全集』第一巻六一三頁参照
- (13) 「忘れえぬ人々」と「画」との関係については、前者の成立に詳しい岩谷信和「解題」『近代文学注釈叢書 11国木田独歩』(一九九一・四、有精堂)一三〇～一三五頁では触れられていない。だが、『日本近代文学大系第10巻 国木田独歩集』(一九七〇・六、角川書店)の山田博光の注釈等を受け継いだ同書の、「忘れえぬ人々」の

設定が独歩の「東金市での体験に基づく」ものであるという認識を踏まえ、その「東金体験」の記述が「欺かざるの記」〔全集〕第六卷（二四頁）の明治二六年五月四日の項にあることを勘案すると、その前月に創作された「画」と「忘れえぬ人々」との影響関係は「考すべきである」。

(14) 『定本起源』一七頁で柄谷は、宇佐見主司の山水画論を参照した上で、「風景」とは「固定的な視点を持つ一人の人間から、統一的に把握される」対象にほかならない」と述べている。確かに、空間と時間とを一つの視座から連続的に捉えた叙述をなす「今の武蔵野」の「自分」と「忘れえぬ人々」の大津との両者が、ここである「風景」を見出したと考えることは可能である。しかし、この両者を直ちに「国木田独歩」の名へと収斂させ、それを「風景の発見」の当事者とする柄谷の論理には飛躍を認めざるを得ない。

(15) 『川崎市史 別編 民俗』（一九九一・三、川崎市）二六〇頁には、「二子・溝口は大山街道（矢倉沢往還）の宿として栄えた。大山街道は江戸城の赤坂御門を出て、青山・渋谷・瀬田・二子・溝口を通り、（略）御殿場に至る街道である。」との説明がある。

(16) 前掲「画」の引用文の直後には、「原目して眼底に描き得る者は、風呂敷包を負ひ白のメリヤス股引を着け、草鞋覚束なく踏みたる少年が、みぞれ蕭々と降る寂寞の境を、茫然四顧して辿り行く光景なり。予は此想像画に対する毎に怪しき暗愁の雲に幽かに泣く」とある。「忘れえぬ人々」の冒頭場面と同様に「草鞋」が出てくるが、ここでは「草鞋」履きの人間の姿が三人称的視点によって客体化されている。そのような「想像画」から対象となる人物を取り除き、語り手「予」の存在を韜晦することによって、「草鞋の足痕」を前景化した「忘れえぬ人々」冒頭が生み出されたこととみる事が出来る。

(17) 前掲『川崎市史 別編 民俗』二六〇頁

(18) 川島敏郎『相州大山信仰の底流』通史・縁起・靈験譚・旅日記などを介して（二〇一六・一、山川出版社）三六頁には、「この年（二八九九（明治二十二年）引用者注）には東海道本線が全線開

通し、その後、一九二七（昭和二）年に小田原急行鉄道小田原線が敷設されるまで、平塚駅が東京・横浜方面からの大山参詣者の新しい玄関口として定着した」とある。

(19) 鉄道による空間意識の変化を説いたヴォルフガング・シヴェルプシュ『鉄道旅行の歴史 十九世紀における空間と時間の工業化』（加藤二郎訳、一九八二・一一、法政大学出版局）五四頁の「伝来の旅の空間が、つまり目的地間の空間が、抹殺されることにより、この二つの場所が直接接近することになり、互いに衝突し合うほどに近づき、両方の場所は、その旧来の特色を失う。」という言葉を端的に先取りしたような表現である。この表現を含む「今の武蔵野」が前掲書の原書刊行の約八〇年前のものであることは甚だ興味深い。

(20) 武知京三『都市近郊鉄道の史的展開』（一九八六・七、日本経済評論社）二〇〇頁

(21) 注(20)に同じ

(22) 当時、国木田独歩は渋谷に住んでいた。たとえ「鉄道可決」の記事を読んでいなくとも、それと同日の一九九七年一月二〇日の『欺かざるの記』に「今夜渋谷村折袴会を森為山氏の宅に開く。」〔全集〕第七卷五二五頁とあるので、独歩が近隣の折袴会出席者などから、渋谷を経由する鉄道敷設の可決という事実を聞いた可能性は十分に考えられる。

(23) ただし、前掲『川崎市史 別編 民俗』二六一頁によれば、実際に玉川電気鉄道が溝口に乗り入れるのは一九二七（昭和二年）を待たねばならない。

(24) 『東京朝日新聞』（二八九八・四・一一）朝刊第四面は、「奠都三十年祝祭はいよいよ昨日を以て宮城二重橋外の祝賀会式場に於て挙行せられぬ」と報じている。

(25) 『川崎市史 年表』（一九六八・一一、川崎市役所）六四頁参照

(26) 天野郁夫『試験の社会史 近代日本の試験・教育・社会』（一九八三・一〇、東京大学出版）二四四頁では、「明治二〇年代から三〇年代にかけて、若者たちの前に開けていた試験の世界」が「学

力」の時代から「学歴」の時代へ」と変化したことが指摘されている。

(27) 木村洋「第5章 民友社史論と国木田独歩―「人民の歴史」の脈絡」『文学熱の時代 懐概から煩悶へ』(二〇一五・一一、名古屋大学出版会) 一二七頁に、「忘れえぬ人々」では、「共同性の範囲内に留まる記憶を不自然なものとする視点が打ち出されて」いるとの指摘がある。

※「忘れえぬ人々」と「今の武蔵野」(武蔵野)の引用は、初刊本『武蔵野』を底本とする『全集』第二巻に拠り、適宜、『国民之友』の

初出を参照した。引用文は読みやすさを考慮して、漢字の旧字を新字に改め、必要なルビのみを残した。また、変体仮名や合略仮名は現行の仮名づかいに変更した。引用文の傍点は断りのない場合はすべて引用者による。

新刊紹介

野村雅昭・木村義之編

『わかりやすい日本語』

本書は、日本語におけるわかりにくいことについて、「日本語の語彙や文法」に直接にかかわるものかどうかと、「日本語を使うさまざまな場面や目的により、その使い方が適切かどうか」ということに関係するもの」との両面から論じられている。第一部では、日本語に固有の特徴だと思われることの分析が試みられており、日本語とはどのようなことばかということについて知りたい人向けに、第二部では日本語の具体的な使用場面、あるいは日本語の習得などについて興味のある人向けに論じるという

二部構成となっている。どのトピックにおいても「なぜ、わかりにくいのか」、「どうすれば、わかりやすいのか」が論じられているが、「分かりやすい日本語とは何か」という点には個人差があるため、本書の執筆者ひとりひとりが考える「分かりやすい日本語」で書かれていることも大きな特徴である。

第一部では文構造や表記の問題、漢語や外来語の言い換え、話しことばの言い換え、ローマ字表記や漢字制限、接尾辞を中心にした造語力などについて述べられている。

第二部では文章理解において、リーダビリティに関わる各段階に見られる文章を分かりにくくする表現の要因の整理や、日本語の「やさしさ」は「幼稚さ」ではないこ

と、国語教育の課題としての「わかりやすい文章を書く力」と理由導入表現のジレンマ、医療や介護の現場のことばのわかりにくさ、放送原稿のいいかえ、外国人被災者の負担を減らす「やさしい日本語」とは何か、などについて述べられている。

日常生活における日本語から、教育、医療、福祉、放送現場といった特定の場における日本語、看板や災害時の伝達手段としての日本語など、様々な場面・状況における日本語から、「わかりやすさ」「わかりにくさ」を考察することが出来るため、日本語学に関わる者でなくとも読んでおきたい一冊だと言えるだろう。

(二〇一六年十月 ころしお出版 A5判 二八三頁 本体二八〇〇円)

〔小川真弘〕